

第1回 植物園整備検討に係る有識者懇話会 議事録

■角田文化施設政策監より冒頭挨拶

京都府立植物園は、隣接する、京都学・歴彩館、府立大学、京都コンサートホールなどとともに、幅広い世代の方々が、自然や文化・芸術、学術・教育に直接触れられる、素晴らしい地域を形成している。

その中でも、植物園はこのエリアの総面積の3分の2を占める中核施設であり、その整備は非常に重要であることから、国内外の植物園に精通した専門家の方々をはじめ、文化や教育分野の有識者の方々等による懇話会を設置し、「京都府立植物園100周年未来構想」の具現化など、これからの植物園に求められる整備内容を検討することとしたところ。

1924年(大正13年)1月1日に開園し、2024年(令和6年)には100周年という大きな節目を迎える。今、こうして委員の皆様をこの植物園にお迎えすることができるのも、先人の多大なる御努力と、変動する時代、時代に合わせて植物園自身も変化してきたからこそ。

次の100年に向けて、未来の京都を担う子供たちはもとより、全ての京都府民の皆様、全ての来園者の皆様が植物に触れながら、学び、憩える場として、植物園の魅力を一層高めて参りたいと考えておりますので、委員の皆様の専門的な視点から、積極的に御意見・御提案をお願いしたい。

議事(1) 懇話会の設置及び運営について

- ・京都府から資料1に基づき説明。
- ・委員互選により、岩科委員が座長に就任。

議事(2) 府立植物園整備に係る経過、課題、方向性について

京都府立植物園から資料6に基づき、植物園の概要を説明。

<説明要旨>

- ・沿革 大正2年博覧会予定地として府が取得したが、諸情勢により断念され、植物園に。大正3年三井同族会から25万円寄付、計55万円を受ける。大正13年1月有料開園。昭和9年室戸台風による大被害。昭和20年9月連合軍の住宅地として指定される。昭和32年連合軍(米軍)から全面返還。昭和36年再開園開始。平成4年新植物園会館、3代目観覧温室オープン。平成21年「魅力あふれる施設」整備計画策定。平成25年昼夜逆転室、高山植物室新設。平成26年植物園開園90周年。平成29年台風21号、平成30年台風21号で大被害を受ける。平成31年京都府立植物園100周年未来構想策定。平成2年コロナウィルスによる閉室、閉園。平成3年北山エリア整備計画とりまとめ、公表。来園者が再開園以降、最小になる。(資料6 P2-6)
- ・組織 園長以下、総務課・技術課で34名。(資料6 P7)
- ・施設概要 240,000m² およそ500×500m (資料6 P8)
- ・植物の種類 園芸種含め 約12000種 12万本 (資料6 P15)
- ・大森文庫 開園当初の貴重の資料とそれ以外に京都府レッドデータのもとになった標本や戦前の標本など多数保管している。
- ・運営 開園時間9-5時 入場料200円で減免制度がある。(資料6 P16)
- ・利用状況 令和2年度57万人、令和3年度58万人 通年80万人以上のところコロナの影響により減少している。(資料6 P19)
- ・季節ごとの入場者 通常春4割、秋3割の割合 (資料6 P21)

- ・最近の施設では絶滅危惧種園、中国植物園を整備している。エリアとしては17のガーデン、パーツに分かれている。(資料6 P27)
 - ・年間行事 展示会と講演会など年間通して開催 (資料6 P29-33)。
- その他園内ガイドとして園長、名誉園長のガイドのほか、技術課職員による土曜ミニミニガイドを開催している。
- ・教育活動として、博物館実習、インターンシップの受け入れのほか、植物園芸相談 800-900 件がある。(資料6 P35-36)
 - ・ボランティア活動状況 130名の登録 栽培補助や標本整理、イベントの開催などの活動が行われている。(資料6 P41)
 - ・植物園予算、決算状況(資料6 P42-43) 令和3年度歳入決算は94,192千円、歳出487,793千円

京都府から資料2に基づき、経過、課題、方向性について説明。

<説明要旨>

- ・平成21年の「魅力あふれる施設」整備計画(資料5))を策定以降、この10年で高山植物室等の多くの施設を整備してきた。
- ・約10年経過し、平成31年に数年後に100周年を迎える節目に向け、京都府立植物園100周年未来構想(資料4)検討したところ。
- ・令和元年に京都府の総合計画に、京都市域のエリア構想として「北山文化と憩いの交流構想」を定め、100周年未来構想を含め総合計画に位置付けた。
- ・令和2年に北山エリア整備基本計画(資料3)を総合計画の構想を実現するにあたり、エリアの整備の方向性を示すための計画をとりまとめた。
- ・今後、個々の施設の整備内容を議論しながら、全体の調和を図っていきたいと考えており、植物園については、100周年未来構想を具現化するために、専門的な視点から議論をしていただくということで、皆様にお集まりいただいた。
- ・100周年未来構想について説明(資料2 P3-4)

- ・委員の皆様には設置要領に掲げた項目（資料2 P5 上段）に基づき意見を頂戴し、ご意見を踏まえて、次の世代の次代を担う子どもたちをはじめ幅広い世代が、植物にふれあうことで、楽しみながら自然環境や植物と人との関わりについて学ぶことができる「生きた植物の博物館」である植物園をさらに魅力あるものに進めて行くための検討を進めてまいりたいと考えている。

議事（3）意見交換

■委員意見

<遊川委員>

一通り説明をお伺いしまして、改めてこの植物園の歴史的な価値、そして現在の取り組みが、言ってみれば日本の中核であること、国際的に見ても最先端の取り組みを行っている植物園と言うことを、改めて深く理解することができました。

申し上げたいことはいろいろありますが、一つは、真の総合植物園として、京都府立植物園に、日本の植物園の標準というか、スタンダードとしてより発展していただきたいというのが、植物園関係者としての思いであります。

なぜかというと、日本全国の植物園は京都府立植物園を見て取り組みを進めていて、京都はこうなっているから、うちもこうやらなければいけないというような、そういう位置にあるわけです。

その上で、今お考えの整備計画というものが、真の総合植物園として、例えばキュー植物園であるとか、ミズーリ植物園であるとか、そういう総合植物園のレベルを目指す考え方で進んでいくのでしょうか。

つまり、教育とか研究の機能というこれからの伸びしろを充実させてこそ、生物多様性を守る取り組みへの貢献に繋がってくると思いますので、本当の国際レベルでの総合植物園をゴールとするのかどうかというところを整理していただくことを期待しております。

さらに三つほど申し上げたいのですが、一つは、こういう場になると、つい施設やアク

ティビティの議論にシフトしていくというか、そこが中心になってきがちですが、大本(おおもと)に立ち返ると、植物園の価値は生きた植物のコレクションです。よく公園と植物園はどう違うのって議論になりますが、その違いというのは、修景やランドスケープ、つまりデザインとして植物を植えているのが公園で、対する植物園は、植えられている植物の一つ一つが、博物館や美術館のコレクション、つまり一つ一つの展示品に相当する、そういう位置にあります。

従って、植物園の価値の根幹は一つ一つの生きた植物のコレクションだということを踏まえて議論をしていかないと、施設や活動の議論になっていきそうなところは注意した方がいいんじゃないかなと思います。コレクションの維持に関して言えば、人材と植物を栽培する環境がとても大事なことです。植物の育成を担う人、そして植物を育てる場所。観賞温室建て替えという項目も出ていますが、同様に、いやそれ以上に大切なのは、栽培施設。バックヤード、圃場をより整備して、そこで植物をよりよく育てられるようにする。そして技術を持った人が栽培を担う、それが植物園の展示、保全、そして学習支援、研究に直結する一番の大本(おおもと)、根本じゃないかと思います。

それから 2 点目、いろいろな議論が、ちょっと混乱しているなっていうふうに思うのは、異なった立場からの植物園のニーズが未整理だからではないでしょうか。例えば、地域の北山というレベル、京都市、京都府というレベル、日本というレベル、さらに地球というレベル、スケールごとにそれぞれの植物園に対するニーズがあります。

それから市民、植物園を運営する方、行政の方、それから全国の植物園といったいろいろな立場によるニーズがあります。それぞれで、ここは大切だというものは、共通する部分と違う部分があるわけですね。共通している部分はどんどんそれを発展させればいいし、コンフリクトしている部分は、明確にして調整する必要があると思います。ですから、ことなつた立場ごとのニーズの整理をすれば、ここは強化できる、ここは調整していかなければいけないということが混乱せずに議論できるのではないだろうかと思いました。

それから、3 点目ですが、COP15 が延期で結論がまだ出ていない状況ですけど、2030 年までの生物多様性保全で何を重視するかという愛知目標の次の目標が議論されている

中で、おそらく明記されるのは、都市生態系というキーワードです。ここは京都の中でも非常に大事な大規模な都市の緑地ですね。単なる緑地にしようという趣旨ではありませんが、ここにすでにもうユニークな生態系が育まれているし、都市部で非常に貴重な数少ないオリジナルな生物多様性も残っている可能性がある、またヒートアイランド化を抑制している、そういう貴重な場所であるわけです。おそらく今後、日本の生物多様性の施策において都市に残された貴重な生態系と生物多様性というものを、どう残していくか発展させるかということが大事なポイントになってくるので、都市生態系という観点からも改変にはやはり慎重な判断が必要ですし、これまでの議論の中にあつた静けさの価値も重要な論点になるんだと思います。

<畑委員>

植物について素人ですが、一市民として府民として植物園のことを関わらせていただいて、幸せだなと思っております。

今回 100 周年を迎えられる植物園という一つのけじめ、時間的な流れを聞いてなるほど 100 年かと思ってですね、その機会にこのような将来ビジョンを語れるっていうのはすごく責任の重いことと感じております。主観的な視点でものをしゃべるのではなくて、100 年前の先人たちが京都に対して、明治以降だけでも、疎水はもちろん、色々な素晴らしい事例を沢山作ってくれていることを考えると、今この 100 年の節目に、この北山エリア全体を私たちが考えて、その中で植物園がどうあるべきか議論をするというのは、大変な責任が重いことだと思います。ですから、一個人的な希望とか、ノスタルジックな発想とかそういうもので物事を考えてはいけないと思いながら今日出席をさせていただきました。

植物って、新しくできた公園はどこか白々しく感じてしまいましたが、それが 5 年とか 8 年 10 年ぐらい経って、再び訪れるとすごく変わったな、落ち着いたなと感じることがあります。松山にサンパークという庭園があつて、そこができた当時に関わった経験がありますが、10 年ぐらい経つとすっかり落ち着いていました。植物というのは、時系列の中で成長とか変化に親しんでいくことがすごく大事なと、一回行ってどうのこうのではなく、回を重ねて足を運ぶ場所にならないといけないと感じたことがあります。

それと、遊川先生が、日本の植物園はみんな京都を見ているからとおっしゃるのは、すごく誇りにも思いました。私は日本の香りという生活文化に深く関わっている関係でいつも感じるがあります。京都に生まれ育って仕事をしている私がこういうこと言うとまた京都人だと言われるんですけども、日本文化そのものを考える時に、やはり畿内の自然環境というのは、日本文化を彩ってきた非常に大きな要素だと感じるんですね。ですからやっぱり、京都はというよりも、この畿内の地域の四季の変化というのはどういうものかというのをきちんと、次の世代の人たちにも共感してもらえような植物園というのが、この京都の植物園の担っている責任の一つかなと思います。

ですから、例えば城南宮さんに、「源氏物語花の庭」という非常にわかりやすい切り口で植物を集中的に集めてある事例がありますけれども、もう少し大きな意味で、やはり日本文化そのものを彩る、畿内の四季の変化というのが、いつ行っても親しめる植物園だと思います。

京都には大変立派な庭園が沢山あります。歴史の中で、庭園作庭という意味で非常にレベルの高い人間も関わったものが多いと思うんですが、いわゆる野趣に富むと言いますか、1年通じて、どの季節に行っても景色が変わって、自然の移ろいが不思議で非常に楽しいものです。そういう植物とつき合いができる植物園というのを、考えて欲しいなと個人的には思っております。

あとこの間、植物園を歩いてみたんですが、北泉門のところに立つとちょっと視点が高いんですね。北西の「四季 彩の丘」の小さな丘を登ると視点が高くなって、やっぱり物事を俯瞰するって楽しいと思いますし、最近北野天満宮の梅のところに、ちょっと上から眺められる視点の楽しい事例ができ、動物園も整備されまして、キリンの目の高さでキリンと向き合える楽しい事例があるんですけども、そういう意味でこの植物園の整備の中に、俯瞰できるそういう視点が、組み込まれたら嬉しいなと。実は今いるこの植物園会館から比叡山の方を見る借景もありますが、あまり楽しいコーナーじゃないと思うんですね。自然に歩いているうちに、視点が誘われてしまうような、そういう計画なんかもあって欲しいと思っておりましたら、事前にいただいた資料に目を通していただくと鳥の目とかモグラの目なんていう切り口で計画もされているので、やっぱり次の整備計画の中にはそういう視点もあるんだなと非常にうれしく思っております。

あともう一つ植物園を歩いて気になったのは、植物園の中の整備も大事ですが、植物園の外周ですね。特に私は空が大きくあって欲しいといつも思っておりますが、北山門とか賀茂川門のところを植物園の中から見ると、架空線、電線をはじめ、空を遮るものが目に入ってしまう。この整備計画の中でそういったものをきちんと整理し、先ほど国際レベルでという遊川先生のお声掛けがありましたように、本当に説得力のある100%詰められた新しい景観なども、目指して欲しいと思っています。

<田中誠二委員>

私も実は、近隣に住んでいまして、植物園をよく利用させていただいています。小さい子供が二人いますので、そういう意味では、京都府の子育て支援のパスポートをいただいて、無料という用語弊がありますけれども、本当に活用させていただいて、園長さんをはじめ、今日は職員の方々いらっしゃいますけど、改めて、植物園を維持管理いただいていることに心から敬意を表し、感謝申しあげたいと思います。

さて今回の懇話会の議論ですけれども、100周年の未来構想で先ほど示された方向性のもとに、特にコロナ禍を経験しましたのでそれに伴う社会情勢の変化等を踏まえながら、ソフト面、それからハード面両方から、先ほど議論もありましたけれども、植物園整備の具体をやっぱり考えていくことが大変重要かと思います。

特に次なる100年の発展を見据えて、従来の「生きた植物の博物館」、これをコアバリュー、理念に、まず徹底した府民目線で私たちが誇る植物園の魅力創出について、憩いの場、教養を高める場、そして、植物学研究に貢献する場を提供する観点から守るべきものは守りながら、環境や時代の変化に適応しながら、園全体の持続可能性というものを高める整備も、必要な観点と思っています。さらには、植物園を基盤に交流やつながりの促進を通じて、国際親善や世界平和に貢献する拠点として、また、SDGsの達成や環境負荷軽減、脱炭素社会を体現できる施設としても、これまでの歴史を大切にしながら、古くて、新しい植物園のあり方の具体をデザインしていただきたい。

そういった意味で、100周年という節目というのは大変よいタイミングではないかと思いました。

特に植物園に来訪される方々、とりわけ青少年育成の観点からも、この植物園で多様な生物や植物に触れることって大変重要で、子供たちにはぜひ、自然に対する畏怖の念でありますとか、その自然や周りの人と共生する意義について、学び、気づき、そして、これらを経験する場として、これからも継続して、植物園にはぜひ、取り組んでいただきたいと思いますし、それが期待されていると思います。

またこうした共通した気づきや同じ価値観を持つ人たちの、人の輪の広がり、いわゆる

繋がりを作っていくことも大変重要だと思います。そうしたことが、生物多様性、これをしっかりと保全していく、そういう意識の醸成にも繋がっていくのではと思います。

こうした役割や機能をこの植物園が府域のみならず、広く世界に提供していく場所であることについて、100周年を機に改めて位置付けてはと思います。

それから2009年には「魅力あふれる施設」の整備計画が策定されましたけど、私はこのスローガンには大変共感したのは、「日本一面白い心安らぐ植物園」。日本一がいいか悪いかは別として、100周年を機に、日本が世界に誇る植物園として、この植物園が国内外からまずは注目される、そして、これからの整備を機に、世界にもどんどん開いていくような、そんな発展をぜひ、私としては、目指していただきたいと思っています。

従来、京都は人と自然の調和というものを大切してきた都市でありますし、この精神性のもとで京都の暮らしや文化が培われて、そのうえに生産活動や消費活動が続いてきた、そういう歴史を辿ってきたと思いますが、この府立植物園は、100年の歴史を超えて、こうした京都の心というか、この精神性を育むことに、これまで大きな役割を果たされてきたと思います。私は、子供が植物園に来て初めてさまざまな植物や昆虫に触れ合ってみて、植物や生物の多様性や命を大切に思う気持ちが育まれる様子を見ながら、植物園の存在意義、よさってというのは、こうした人の心や人間性を豊かにしていく点にあると思いました。

さらに、教養を高めることや人の心や暮らしを豊かにすることに加えて、植物園の役割として、大学や研究機関等と連携した学術研究に資する取り組みを強化することも重要と感じます。綺麗な空気や食料、そして医薬品の未来を確実にするために、世界の様々な地域の課題であります生物や植物多様性の保全に資する研究を進めることは、意義あることと考えます。改めて学術研究について、京都府立大学とは包括協定がすでに締結されていますし、ぜひそういった意味で、生物多様性や絶滅危惧種の維持・復活、種苗保全のための今後の研究の取り組みと成果が、世界の人たちにその知見が共有されるようになればいいと思います。もちろん希少植物の維持に必要な栽培技術の継承も含めて、いろんな意味で、多面的な機能強化と魅力の充実で、京都府立植物園が発展することを特に、期待していきたいと思っています。

最後になりますけれども、植物園の周辺にはせつかく、豊かな自然と、隣にはコンサートホールや大学がありますし、例えば芸術と植物、あるいは文学と植物といったようなコラボレーションを、これからぜひ企画としては大いにやっていただくと、若い世代、これまで誘客できなかった人たちにも魅力が広げられるでしょうし、それからICT等を含めた、その先端技術を活用した、ARとかVRとか言われていますけれども、植物園に来られない人たちのためにも、そういったバーチャルでも、植物園の魅力や展示ができるような、お金はかかりますけれども、仕組みもあると、修学旅行生や教育旅行等含めて、生徒たちの事前学習の補完教育にも資するのではないかと思います。そういった新たな技術や手法を用いての展示の多様な取り組みというのも、必要と感じました。

また、小中高等学校の課外授業や修学・研修旅行に年間を通じて対応できる体制の整備と体系的な教育プログラムの開発、展示手法の確立や府民に向けた講座等の開設も継続して取り組むことが大切と思います。

< 染川委員 >

私は博物館の仕事をしていまして、動物園、水族館から考古、歴史、科学館、子供の施設、など広い分野で利用者の視点を重視した園館づくりのお手伝いをしています。その私のキャリアとは別に、この近くで生まれ育って、子供のころから植物園に出入りしていて、半木の道が整備されていない時から木に登って遊んでいたという、そんな感じの私とが混在しています。皆様が多様なご専門の立場から意見をおっしゃったので、私は博物館教育として、どういう場が展開できるかっていう考えを少し述べたいと思います。

博物館教育は生涯学習の代表選手のようなものです。何か学校のようにカリキュラムがあるわけじゃなくって、一人一人が自分のペースで楽しんで、いつの間にかそれが学びに繋がり、さらに周りの人や専門家の人たちと交流することで、経験や学びがどんどん螺旋状に積み重なっていく、そういう状態が育まれる環境を作ることが大切だと考えています。一般の利用者としてはプライベートタイムを楽しむ場としての来園が多く、特別に勉強しようと思ってくる人は少ないと思うんです。けれども、そういう方々が、たまたまついでに来たけれど、予想よりもうんと綺麗だし気持ち良いところだと気に入ってくれたり、全然知らなかった植物に出会えたり、自分が前から何か気になっていたことがここで解決できたとか、そういう、使い方をしていく。なんか楽しかったね、また来ようかなって、再訪を願ってくれるように。また、そのことを SNS を通して、誰かに発信してみたいと思って、表現して発信する。そんな風に人々が何度か訪れて、様々な利用方法をし、だんだんと広がっていく。そこから研究者も生まれる。そんな場となって欲しいです。

また、植物園のリニューアルをどのようなプロセスで考えていくかは、先ほどのご報告に加えて、利用者にとってどうなのかをしっかりと把握する必要があると思います。どのような経験をするか、利用者の植物に対する理解や愛する気持ちが増すのか、変化する社会状況の中ではどうなのか、あるいは違う分野の利用者の興味や専門を、ここでどんなふうにかかしてもらえるかとかを丁寧に考えて行けると良いでしょうね。専門家だけでリニューアル案を作ってしまうのではなく、府民とのワークショップで知見を得て、積み上げて行くプロセスが一番大事なのかなと思っています。

アイデアを出しお互いが学び合い、前向きな議論を重ね、新しい植物園を作っていく。そういうふうになったら関わるスタッフも参加する一般の人も楽しいと思うので、何かそういう場をうまく作っていただけたらなと思います。

それには、人材も大事で、博物館教育というか植物園教育系のスタッフで学びをうまく植物につなげていける人も入って、チームで取組まれたらいいかなと話を聞いていて思いました。

言うまでもないことですが、こうしたことは、今まで続けて来られた植物の育成や研究活動の上に成り立つもので、両輪であると考えています。

<角野委員>

私はこの懇話会で二つの視点について、今後、意見を申し上げたいなというふうに考えております。

まず一つ目は要するに植物園はただの公園ではないということです。植物園はこの当初の理念にありますように、「生きた植物の博物館であるということ」そのことをより深めて考える必要があるのではないかなと思います。

ただの公園でないというのは、ちょっと言い方は誤解を生じるかもしれませんが少し説明しますけれども、今までのいろんな議論の中にもありましたように、植物園はまず研究の場であるということ、そして教育の場であるということ、そしてそのことを市民の方と共有していくということ、またさらに、その研究成果を世界中の研究者たち、或いは学生たちとネットワークをしながら、深め広めていくということ。これが、まず、その生きた植物の博物館であるということのアイデンティティであり、それが消えてしまうと、もう植物園ではなくなるだろうなと思っております。

そして、そのことが保障されるためには、先ほどの研究機能や教育機能が、空間的にどのように保障していけばいいのかとといったことを考えたときに、やはりここには、ある種のサンクチュアリ、聖域ですね、そういったものがこの空間の中になければいけないのではないかな。そして、そのことを、研究者も学生も、そして地域の方々もしっかりその価値を認め合うということが重要ではないかなと思います。

そしてそのサンクチュア리를維持していくためには、当然その様々な形でのバックヤードも必要になります。それはもう不可欠であると思っております。

今後、そのことがしっかりあることが、言ってみれば、植物園の重みを一般の府民の方々にもきっちり伝えていくことに繋がるのであろう。府民の方々がここをより一層大切にされる、誇りに思われるということに繋がっていくのではないかなというふうに思っています。一種、この研究のオーラのようなものが、植物園へやってくると、そこはかたなく感じられる、そういうところまでいくと、この生きた植物園の博物館であるということが、府民の方にもご理解いただけるのではないかなというふうに思っています。その

中身は今後、いろんな特に専門家の先生方からですね、お伺いしたいなというふうに思っております。

それから二つ目の論点は植物園がこの場所にあるということをどう評価するのかということかと思えます。冒頭で歴史をご紹介いただきましたけれども、この場所自身は、言ってみれば、洛外なわけですね。京都の市街地の近郊でございます。そして、近代以降、明治以降に、ここで御大典の計画が出て、洛外であり、もっとさかのぼりますと、当然上賀茂神社さんとか、そういった場所がこの地にしっかりとあって、そして近代以降に、この上賀茂下鴨というあたりは、優良な住宅街としての顔も充実させて参りました。

そしてそこに植物園や、あるいは大学の研究機関や以前で言います資料館ですね歴史彩館、そういったものが、この場に蓄積されてきているという、この強みをやはりしっかり意識する必要があります。

また、鴨川のすぐ隣にあるわけですがけれども、鴨川というのは、もう山地のように、上流からですね、ずっと流れて行って、市街地の中を抜け、そして、三川合流して、大阪湾に行くわけですが、実はその鴨川自身が一つの大きなストーリーを持っているはずで、それは文化的なストーリーでもあり、自然のストーリーでもあり、いろんな産業・交流のストーリーなのかもしれません。

そういった鴨川という流れの中の横にあるということ、これを縦の軸だとすれば、もう一つは、京都の碁盤の目ですね、まだ洛外というものの、北大路通りを越え、北山通りという、そういう東西の通りの個性とかアイデンティティ、そういったものとも、この場所が関わっていくところなのかなというふうに、感じております。

つまり、土地の履歴をしっかり尊重しながら、そして、そのうえで次に周辺環境をいかに良好な相互に高め合うような地域づくりをしていくのかということについて、今後議論ができればいいんじゃないかなというふうに思っております。

植物園の中に神社があるというのは、すごく面白いことだと、思っております。そのこと自身が歴史の深みを感じさせますし、またこの場の価値とか、そういったものを考えていただくことにも繋がるのではないかなと思います。

次の 100 年の植物園のビジョンを考えるとというミッションがあるわけですが、当然のことながら、次の 100 年のこの周辺市街地、この周辺の市街地が次の 100 年どうなるのか、どういうふうにつなげていくのか、その時の中でこの場所はどのような役割を今後期待されているのかという辺りについて、議論できればいいなと思っております。

<岩槻委員>

今日はこの懇談会で議論する5つの項目が挙げられていますので、これに沿って話させていたいただきたいと思います。この5項目は設置要領に挙げられていますので、語句の修正はここでしてはいけないものだと思いますが、言葉遣いというのは私非常に気になる方ですから、そのことも含めて、考えさせていたいただきたいと思います。

まず、第1項の魅力向上及び施設等の整備に関することというのは、これは、当然そういうことが議論されるわけですが、魅力というのは誰のための魅力なのかが曖昧です。植物園を訪ねてくる人は、一人一人全部要求が違うわけで、私も京都に30年間いて、特に後半は家族と一緒に利用させていただいておりましたが、小学生だった子供が植物園へ来ますと、堅苦しくて行儀よくせんといかんのでかなわんと、いう言い方をしたりして、自宅近くの稲荷山で泥んこになる方がよっぽど楽しいという、そういう入園者もいるわけです。後にありますように次代を担う子供たちをはじめ、という言葉がありますが、そういう時には、そういう入園者も考えないといけないということです。

今、コロナ禍でちょっと止まっていますが、京都へは観光客はまた必ずお見えになると思います。外国旅行するときに欧米の人なんかで、私が植物園関係者だったから特にそう思ったのかもしれませんが、植物園へ寄ってみてその町を知ろうということをお考えになれる方が結構いらっしゃいます。

実際、京都の植物園へ来て、非常にいい植物園だったという話は植物園仲間からもしばしば聞かせていただいたので、植物園自体は非常に皆さんから楽しまれる、誇っていい植物園ですが、植物園がその都市の顔になるということを実際に果たせるかということになりますと、今の京都府立植物園は、いろんな人々の興味を引いている、しかも日本一になるというお話がありましたが、日本一の植物園になっているということがどういうことなのかは、ちょっとお考えいただきたいです。

私の府立植物園の印象としては、50周年の頃に、日本の森という意欲的な植生配置つくろうとされていました。当時は、府立植物園に限らず日本中にお金がなかったのも、職員の方が本当に努力して、手づくりでいろんな植物を集めて、各地域の植生を代表したよ

うな、区画をつくる努力をされていきました。今から考えたら、非常にチャチなもので、そのもの自体は、そのままでもいいとは決して申しあげませんが、しかしそういうものをつくって、京都府立植物園は、ここで日本の都であった、日本の中心であったことを、ちゃんと代表するような植物園にしようという意欲をその頃は持っておられました。そういう発想が一つあったらいいと思うわけですが、魅力向上ということの中に、入園者は当然京都市民が一番多いですから、入園者の魅力向上のためのとえばそこが一番基本になりますが、それと同時に、外国人が訪ねてきたら、京都の顔はここにありますよというようなことも示せるような発想で、魅力向上という、施設の整備を図っていただきたいというのが第1項についてのコメントです。

それから第2項です。言葉尻を捉えるようで、先ほど染川さんがおっしゃってくださったこととも関連しますが、植物園に勉強しに来る人はいないんです。勉強って、(嫌なことでも)強いて勉めると書く、一生懸命勉強をしに植物園にくるのではなく、やっぱり植物園は遊びに来るところです。

教育という言葉がよくないんです。教育という言葉は、明治時代に富国強兵を目指した日本の教育体制を作るときに普及してきた言葉であって、教え育てるものであり、植物園へは教え育ててもらうためには、来ないんじゃないかと思います。正確な表現なら生涯学習支援、そこへ来て何かを学ぼうという人をどうやってサポートしていけるかという姿勢で運営していくものであって、教育機能の強化ではなくて、やっぱり生涯学習支援機能の強化という流れにしていきたいと思います。

言葉遣いってそんな言葉尻をつかまえるような、と言われることがありますけれども、例えば職員の発想の転換には非常に重要なことでもあります。私、日本の多くの博物館がここ10年20年ですごく良くなっていると思いますが、それはやっぱりそういう言葉遣いを含めての発想の転換もあってだったと思います。

研究については、ちょっと一度に言ってしまいますと長くなってしまいますから、私自身も研究者として言いたいことがたくさんありますので、第2回目以降に言わせていただきたいと思います。

それから教育が全く不要というわけではなくて、技術を伝承する後継者養成のための教育については、京都府立植物園は、非常に優秀な技能を持っておられる方がいらっしゃるのです、技術を、次の世代に伝えるという、それは、府立植物園の次の世代というわけではなく、日本の植物園の次の世代に伝える、教育の機能はしっかりと果たしていただくことが大切じゃないかと思えますし、次の 100 年を目指した企画の中にはぜひ取り上げていただきたい課題だと思えます。

それから、先進的な植物園における取り組み事例に関するのですが、この先進的な植物園というのが、キュー植物園やミズーリ植物園みたいのを目指すかという話ですけど、私はそういうのを目指すということがすべての植物園のあり方のためにいいかということに関しては、やはりそれはその植物園の規模の問題もあります。京都府立植物園は本当にキュー植物園ぐらいの規模になるのか。そういう規模になるのなら、キュー植物園のような形を目指していいのかもしれませんが、その場合には、面積でも第 2 植物園的なものも必要になるでしょうし、人も倍増ではすみません。キューは今 500 人ぐらいですからね、そのぐらいの規模ですので、(そういう将来計画を論ずるならそれなりの話が必要ですが、) ここ当面は残念ながら期待できないわけですから、そうだとすると、近未来に考えられる枠の中で一体何ができるのか。その枠の中で先進的な植物園として何ができるのかということと取り組まないといけないので、夢ばかり見るというのはどうかと思えます。現実的に着実に、次のステップで何ができるかということを考える必要があります。

その次の連携のことですが、北山エリアの多施設連携のことに関しても、非常に夢があることが書かれておりますが、もともと日本人全体がそうですけども、日本の植物関係の機関が、博物館もそうですし、それから植物園もそうですけども、自分を守るということには一生懸命になります、あまり人と協力しないという姿勢が、傾向が非常に強いです。これは、一方では職人芸的な部分を伸ばして立派なことをやっているという側面もあるのですが、連携ということになりますと、これは連携を相手に求めるだけではなしに、自分の方から提供するものも必要になります。100 年の計画を立てるために、描かれている方向で今の北山エリアで本当の連携が成り立つのかとちょっとお尋ねさせていただきたい。

これはむしろ 100 年先の到達点を描いて、連携なんて中途半端なことではなしに、北山エリアの一体化を実現するために、今日は何をしたらいいのかという、検討を進めていただければいいのではないかというふうに思います。連携というと、植物園があつて、大学があつて、大学の個々の研究と植物園のこの事業が仲よしだから一緒にやりましょう的なことなんですけども、そうではなしに、府立大は京都府の知の中心と自負されており、コンサートホールもあつて、歴彩館もあつて、芸術的な側面もあり、それから植物園も感性を育てるわけですから、感性と知性と合わせて、京都の心というような、そういう組織が一つになってしまうぐらい一体化できるという、そういう未来を構築するためには、何から始めるのか検討できれば有益かと思ひます。

<石川委員>

この懇話会のメンバーに加えていただくことになり、4月の初めに、久しぶりにお伺いいたしました。そしてご案内もいただき、ちょうどその時に桜が満開で、それも前日まで結構ひどい雨だったんですけど、ここに来た2日間は素晴らしいお天気になりまして、その満開の桜のもとで、大勢の方たちが、ご家族と一緒に、或いはお友達と一緒にということで、とても楽しそうに散策されていまして、これが京都府立植物園の魅力だなんて、京都の方たちに親しまれているっていうことを実感いたしました。

先ほどのご説明で、コロナの前でしたら、もっと4月に入場者があったということで、どれほど多くの入場者があったのか想像もできません。私にしてみれば十分、たくさんの人が入られていたんですが、それよりも多く、もうラッシュアワーのような、人の集まりになっていたのではないかなと、先ほどの説明をお伺いして想像しました。それほど親しまれている植物園であることということが、何か非常に東京から来てもうれしく思いました。そして、園内を歩きまして、まず樹木が非常に立派であるということ、そこから100年の歴史ということも、十分その重みを感じました。それから、たくさんの趣向を凝らしたガーデンがあり、それは複数形のガーデンズということで、一つ一つのガーデンも楽しませていただきました。

そのように植物園は、植物に親しみ、人の心を豊かにするというので、先ほどからいろいろな委員の先生からお話がありましたように、まさにその通りだと思います。それで、これからは、世界の植物園を目指すという、いろいろ研究施設なども設けるということで、さらにこの府立植物園が発展することを願っております。

私は、植物画を描いておりまして、そのテーマのひとつにボルネオの植物を描くというテーマがあります。それで、ボルネオに行くたびに、近年特に、熱帯雨林が縮小してきているということを感じたり、森が荒れたりしていることを感じます。

京都には熱帯雨林の研究施設や、研究をしている先生方も大勢いらっしゃると思います。

私は自分の熱帯雨林の植物の絵を発表するときに、時間があれば、できるだけその熱帯

雨林の現状などをお話して、それは国内外でも同じですけど、話をすると、熱帯雨林の現状はそういうことになっているのね、よくわかったという話を後から結構いただきます。つまり、知らせることがとても大事だと思います。知らなければそれまでですが、知ることがどれほど大事かということを近頃、痛感しております。知らせることによって、知ることが実現するわけですから、この植物園のあり方としては、植物に親しむということが大前提であるとは思いますが、もう一つ 21 世紀の植物園に、どういうことを期待するかというと、やはり、だんだん悪化する地球環境というか、温暖化による気候変動は起きていますので、地球にとって植物がどれだけ大事かということを多くの人に知らせる機会を作っていただくのが、これから植物園に担っていただく役割の一つではないかというふうに、常々考えておりました。

京都は恵まれた土地にあるということで、地球環境について、これからいろいろなことを植物園でも発表していただいて、これからの地球環境を考える機会になっていただけると嬉しいなと思います。

私もいろいろな方にお話して気がつくのは、知っていただく機会が少ないということがあるので、まずその入口として、植物に親しんでいただく方たちに、そういう地球環境の変化の事例などを紹介して、それから、子供から大人まで、広く理解していただけるような環境を植物園で作って、担っていただけるといいなというふうに願っております。

■欠席委員意見 事務局読み上げ①

<田中安比呂委員>

植物園が次の100年を迎えるにあたって、時代に応じて変化していくのは大切。松尾芭蕉が説いた「不易流行」という言葉のとおり、変えてはいけないものとその時々に応じて変化し、本質を伝えるために変えていかなければならないものがある。上賀茂神社の境内を維持していくのも同じこと。千年続いた境内を大切に後世に伝えていかなければならない。維持していくのは多くの人助けが必要であり、玉垣の中は変えられないが、参拝者のために休憩する施設を作るなど、時代に応じて変化をしながら今日まで守り伝えてきている。植物園の本質を大切にし、どのように活性化していくか、多くの人により一層魅力のあるものにしていくかを考えることは大変大切である。

珍しい植物を展示するのは大事なことだが、もっと植物と触れ合うことができるようにしていくのはいい考え方。例えば育て方の凄さを見てもらうなど、多くの方が植物の魅力に触れ、接することができるようにしていく方がよい。

また、植物を見て触れて楽しめる施設にするとともに、来た人がゆっくり休めて、心が憩うことができるよう、充実した施設にしていくという考え方も非常に重要と考えている。

植物園と一緒に地域も一体となって変わっていかうとする考えも必要。京都市民だけでなく、全国から人が訪れる植物園にしてもらいたい。子どもたちが大きくなって、昔、府立植物園に来てよかったと思ってもらえるようにしてもらいたい。

■欠席委員意見 事務局読み上げ②

<松谷委員>

先日いただいた懇話会の配布予定資料は、すでに公表されていた資料と同じでしたので、それらに基づいた意見を、総論と各論に分けて述べます。各論では、府民に公表し、パブリックコメントまで求めた計画、「資料3 北山エリア整備基本計画」の問題点などの意見を述べます。

総論。京都府立植物園は、アカデミックな施設、生きた植物の博物館。単なる緑空間ではなくまた、公園でも庭園でもありません。100年以上前、武田五一、第十代京都府知事である大森鐘一、三井家同族会ほかのみなさんの、原野であったこの地に日本一の植物園を、との熱き思いを抱いた先人たちの意志をつなぎ続けることは、京都人の責務・京都の文化・伝統です。戦後、連合軍に接収され植物園機能がほぼゼロになった厳しい歴史を経験しましたが、奇跡的に再開できた大きな原動力は府民の声でした。「一日も早く昔の植物園に復元せよ。公園化することなく純粹の植物園にせよ」。100周年を目前にし、京都府立植物園の本質・使命を大前提にした懇話会であることを、元園長として期待します。

植物園は神秘のヴェールに包まれた秘密の花園。

各論。設置要領に「100周年未来構想(資料4)を具現化するため」と謳っているが、具現化するための計画たる資料3 北山エリア整備基本計画は、未来構想で計画した本筋から、一部を取り上げ誇張し、植物園の本質を考えない勝手解釈した、設置者側の都合のよい計画となっています。植物園を公園にしようとする計画です。賑わい、回遊性、利便性を求め、本来アカデミックな施設であり続けるべき植物園の姿が見えません。

私を含め園長、副園長経験者の三人は専門家・実務経験者の立場から、この基本計画は、京都府立植物園の使命・本質を真摯に論じていない計画と危惧したことから、設置者に見直しを求めるよう記者会見で訴えました。

資料3 北山エリア整備基本計画。賑わい創出、この言葉が最も気になります。商業施設を誘致し、賑わい創出するその代償として植物園の土地を削減する案ですが、本来の使命である植物を見せることを犠牲にしてまで賑わいを必要と考えていることに悪意を感じ

じる。北山通と連続性、半木の道と連続性、このエリアにあるバックヤードを横断する発想。世界の植物を栽培するバックヤードをなんと考えているのか、多分何も考えていない。世界の植物園の笑いものとなる。南北の軸、東西の軸。

研究機能の充実・向上。最も気になること①バックヤード、人材確保の言及が一切ないこと、植物園の使命・本質がわかっていない、わかろうとしない計画と露呈。これを認め公表した設置者側は、京都府立植物園の将来を真剣に考えているのか不信。②未来構想に明示されている植物が主役や栽培技術の継承・発展による世界の植物の栽培・保全・育成・展示の大前提の場がバックヤードであるが、その言及がないどころか、バックヤードを横切る賀茂川沿いの半木の道から通路をつくるとの計画は、栽培技術の重要性を無視した公園計画であると言わざるを得ない。③情熱・意欲を持った人材確保の言及もない。花は勝手には咲いていない。咲かせている。④植物園を中心に周辺施設がスムーズに繋がり、ハード・ソフト両面での垣根をなくした連携が可能になるような動線等の整備、往来自由なテーマパークの中の一つの施設が植物園であるとの発想は府民から受け入れられない。⑤植物園を中心に周辺施設がスムーズに繋がり、ハード・ソフト両面での垣根をなくした連携を可能とする施設整備。④と同じでこの文言は完全に公園化を意味し、植物園はどこからでも入れるもはやテーマパークに成り下がる。⑥北山通と連続性を持たせ、人の流れをエリア内に引き込む商業空間・動線の整備、イメージ図に多出する賑わい創出の根拠となる文言だが、四条河原町ならまだしも、ここ植物園に商業施設を設けた賑わい創出は全く不要。アカデミックさの消失。⑦半木の道と連続性を持たせ、賀茂川沿いの魅力を發揮して人の流れをエリア内に引き込む施設・動線の整備、バックヤード機能を無視してまで動線整備する計画は論外で、植物園の本質を全く分かっていない計画である。京都府立植物園の存在を否定。

研究について。植物園が行う研究と大学などの研究者が行う研究は別である。総合植物園たる京都府立植物園が行う研究とは京都府立植物園条例、設置、第1条、植物学の研究に寄与するため、とあるように、これは植物園で栽培する植物を研究者が大学で研究するための寄与であり、植物園に植物学研究機関を設けることではない。先輩園長からそう教

えられた。栽培担当職員は地道な栽培を続け、何度も国内初開花などに成功、その成果は日本植物園協会誌に論文として投稿するなど、レベル向上に努めている。これはりっぱな研究である。

京都府立大学構想。2022年4月25日に公表されましたが、植物園の存在をアカデミックな場ではなく単なる緑空間としてしか捉えていない表現が見受けられ、知の拠点たる大学の植物園に対する意識の低さが気になります。植物園の緑がエリア内に広がり、各施設が木々の緑の中に佇む空間の創出、施設の枠を越えて人が自由に往来できる空間づくり、垣根を無くした連携、エリア外を通らなくても回遊でき、など、府立大学附属植物園的な発想、エリア内の緑の多い空間的発想を懸念します。

以上、極論もありますが、資料に基づいた私の思うところの意見を述べました。この懇話会が、京都府立植物園の100年後もこの地で凛とした存在であり続けるためのよすがとならんことを願ってやみません。

■欠席委員意見 事務局読み上げ③

<水上委員>

府立植物園の整備は、平成21年に策定された府立植物園「魅力あふれる施設」整備計画をもとに進められ、それを受けた形で平成31年の100周年未来構想、そして今回の整備計画がある。これまでの整備計画で実現できたこともあれば実現できていないこともある。今回の北山エリアの整備基本計画は、平成21年以来の整備計画を発展的に進めていく上でのチャンスと捉えてもいいと思う。

府立植物園は100年近い歴史を持たれ、また年間80万人が訪れ、面積も約24ヘクタールと国内最大規模、きわめて優れた栽培技術を持たれるなど、日本有数の植物園であることは間違いないが、さらにこれを世界トップクラスの植物園として発展させることを目指してほしい。

今回の植物園整備計画の中で打ち出されている①教育・学習・研究機能の充実、②観覧温室の改修・建替え、③魅力を高めるための企画運営の見直しという方向は、整備方針として真っ当であり、基本的に支持する。

その上で、次の2点について付言させてほしい。第一に現在の植物園に不足しているのは、研究機能だと思う。設置条例に植物学の研究に寄与するとあり、また植物園のコンセプトとして生きた植物の博物館というのを打ち出されている。植物学の研究に寄与するというのは、研究者のために植物を提供するとか栽培するというのではなく、植物学の研究をしてその成果を発信することであり、博物館にしてもただ資料を収集して展示しているのではなく、収集した資料を研究して、あるいは研究の一環として資料を収集して、その成果に基づいて展示している。

そのためには、標本庫の充実等のハード・ソフト両面での取組を進めることは大切で、研究機能を高めることにより、府立植物園が日本一の植物園になり、世界水準の植物園になるだろうと思う。京都こそ、そのような植物園にふさわしい土地ではないか。

2つ目は次世代への取組。コアな植物愛好家、植物園愛好家だけでなく、20年後、30年後の植物園ということを考えると、次の世代のこどもたちに、そして若いお母さん、

お父さんに植物の魅力、植物園の魅力を伝えることが非常に重要。そのためには、このような世代に植物園に来てもらうきっかけとなるような、魅力的なイベントや学習プログラムを展開できるようなハード面およびソフト面での整備も重要である。

せっかく素晴らしい温室があるのに、入園者の2、3割しか入っておらず非常にもったいない。まず温室に来てもらうのが大切であり、入園料金に温室の入園料を含める等、入園料体系の見直しも必要ではないだろうか。

■岩科座長意見

私が当日本植物園協会の会長を8年ほど勤めさせていただいて、色々な場所で講演や、挨拶など、色々なことをやらせていただきましたが、その時に必ず、大体、いろんな挨拶で話させていただくことは、動物園は檻を作ってそこに動物を入れると、もうほぼ完成ですが、植物園というのは、そこに種をまいた、或いはそこに今苗木を植えるだけでは完成ではないんですよ。

樹齢100年の木を作ろうと思ったら、50年でもなく99年でもなく、確実に100年要ります。ですから、今日委員の皆さん方からも何回も話出ましたけど、植物園を作るというのは、100年、200年のスパンを考えていながら、その上で、今年何をするかということをやっついていかないといけないのが、動物園と植物園を作る一番の違いではないかと思っています。

ちょっと耳の痛い話ですが、京都府も公立の植物園ですが、日本植物園協会に入っているのは、公立の植物園が多いんです。各都道府県の知事って直接選挙で選ばれていて、しかも任期が決まっているんですね。それで、自分の任期の間にいかに業績を作ろうかと、どうしても考える。それは当たり前といえば当たり前なのかもしれませんが、先ほど話したように、植物園は100年、200年のスパンで考えなければいけないから、短い間に何とか業績を作ろうという考えじゃない広い考えでないと、僕は本当の植物園は作ることができないんじゃないかと思っています。

それから、やはり私も筑波実験植物園という、茨城県にある植物園長をさせていただいて、開園1年目からずっと植物園関係で仕事をしてきたんですけど、その関係で、日本とかそれから他の国に行っても、植物園は必ず見るようにしています。いつも感じているのは、僕はこれもいつもいろんなところの挨拶で話をするんですけど、その国や地域の植物園を見ると、その国や地域の文化程度がわかると思っています。植物というのは、よほど綺麗な花が咲くとか、それから、例えば食虫植物のようにキテレツな恰好をしていると目を引くんですけど、例えば、筑波植物園1年目に開園して、地元の皆さん方に来ていただきました。そしたら、なんだ俺らの周りには植物と同じ植物しかないんじゃないか、

と言われたんです。つまり、植物園はその植物に対するうんちくがないと面白くないんですね。植物園に来た方に、植物に関するいろんな知識を与えると、やっと面白いですねっという言葉が聞こえます。そういう点では、そこの植物園を見ると、その地域や国の文化程度がわかると思っています。

京都は歴史の古い都市ですから、京都の植物園で一番見たいのは、ここに来たら、京都の植物と文化の関係がすべてわかる、というようなことです。それぞれの都道府県に、そこの植物園に行ったら、そこの県の植物は大体わかる。そこの植物園と、その県の植物と文化がわかるというような植物園を、全国すべての都道府県に作って欲しいと思っています。

■戸部植物園長 今後の府立植物園について意見

以前、「魅力あふれる施設」整備計画の委員を務めており、その後、園長になって5年目の春になります。公立の植物園としては日本国内で一番古くて、かつ、一番の来園者を抱えて、これから発展していきたいという中で、これから先の100年をどうしたいかというときに、もちろん今のままでいいというものもあると思うんですが、本当にそれでいいのかなと考えます。

世界を見てみますと、最初の植物園が1544年ですかね。ピサ大学とかイタリアからできてきます。あとヨーロッパのいろんなところに広がっていくわけですが、植物が医薬品がわりとして利用され、薬の研究のために植物を栽培してたところが、一般公開されるようになって植物園が始まるわけです。キュー植物園やミズーリ植物園も京都府立植物園よりはるかに歴史が古いわけですが、ヨーロッパに比べると後から出てきた植物園になります。あれもこれも含めて全部の国で今現在、どれぐらいの数の植物園が世界にあるかという、2500ぐらいと言われていています。最初はほかの目的で作った植物園を、一般の人たちも見ていただくようにしていきました。

京都府立植物園も100年前にできて、植物を通して一般の教養に資するという形で続いてきましたが、世界の今の変化を見ると、生物科学にDNAが利用されるようになったのが40年ほど前で、そのころから世界の生物の多様性が損なわれてきているということが言われるようになりました。盛んに発信する研究者もおられました、状況は全然変わらなかったわけです。それで今はいろいろなところで、特に植物園が中心になって、生物多様性、植物の多様性を保全するための取り組みを始めており、現在の主立った植物園の仕事になっているわけです。振り返って、この京都府立植物園を見たときに、正直な所、それが全然ないわけです。つまり、研究という取り組みがありません。今のままではいけないということで「魅力あふれる施設」整備計画の委員会が開かれた時も何度かお話をさせていただいたことがありました。

これから知恵をだして、工夫を重ねて、京都府立植物園に生物多様性や植物多様性を研究するための部門が欲しいなというふうに思います。京都府の方はそのことをよく理解し

ていただいたというふうに思います。

植物園は、さきほど2500ぐらいあると言いますけれども、そういう生物多様性の保全に取り組んでいるのはどれくらいかという、1割ぐらいです。今でもまだ十分とは言えない中で、日本はどうかという、実際なかなか厳しいものがあります。研究者がいるところは、国立大学の附属植物園があり、数名研究者がおられますが、北大、東北大、東大、大阪公立大、そういうところしかいません。また、必ずしも全員が生物多様性保全の取り組みをしているわけではありません。

インドネシアのボゴール植物園は「植物園」が「植物保全のための研究センター」と正式に名前が変わってしまいました。植物園がこれから何に取り組むかということメッセージとして植物園の名称を変えてまで発信する。世界の植物保全に関する意識も変わってきています。

最近言われるのは昆虫の種が減っていることです。昆虫の種が減っているということは間接的には植物の種も減っていることを言っています。世界全体の生物は780万種と言われていて、実際名前をつけて知られているのは1割しかないと言われていています。なので、われわれがまだよく名前も知らないうちに消えてしまいかねないと考えています。

ここの植物園には植物の多様性の保全に関する取り組みがない。やってないことはありませんが、研究するという視点からはないって言って等しいかと思います。職員の中には、そういう意識を非常に持たれる方が何人かおられて、それが大きな支えになっていますが、これからのことを考えたときには、決して十分ではないので、何とかしていかないといけないというふうに思っているところです。

それから、コロナが始まる少し前までは外国人が増えていたように思います。実は人手がなくて、来園者の国籍までの調査はできておらず、感覚でしかわかりませんが、外国人の来園者は非常に増えていました。私も世界中の植物園をいろいろ見てみましたが、京都駅を降りて、10分足らずで地下鉄が来て、10分乗れば入口に立てるなんていう植物園は世界中にはないんじゃないかと思います。京都府が行う文化活動の表の活動として、植物園は非常に重要な役割を持っていると思いますし、外国人を意識した、取り組みもこれ

からを考えた際には大事かなと思っています。

さらにもう一つ付け加えると、京都府と奈良県は自然史博物館がありません。結果として京都府の植物資料が全く蓄積されていないわけです。これから100年先、200年先のことを考えたときに、資料があれば比較できるわけですが、生物がどう変わっていくのかを比較する資料がないので、今からでもそれを集めるための取り組みができればと思っています。そのためには標本庫を整備し、整備するだけでは標本庫は機能しないので、植物を採る人がいて、標本を整理する人がいて、標本庫が成り立つわけです。

今申し上げたように、府立植物園には課題は多いんですけれども、その一方で課題は見えているなという気がします。

■岩科座長とりまとめ

今日は様々な意見を伺いましたけども、今日は第1回という点もあるので、総論的な話ではありましたが、ただ、様々な意見があるということは理解できていて、ただし、私は様々な意見があるのは一番健全な姿ではないかと思っています。ですから、様々な意見があるということはそれだけ少なくとも京都府の皆様は植物あるいは植物園に興味を持ってきているということは間違いないので、それで様々な意見が出てくるのだと私は思っています。

ですから、様々な意見が出ることは悪いことではなく、非常に健全な姿だと思っていますので、様々な意見を聞きながら今後、何回かある懇話会では、色々な意見をお聞きしながら集約できれば、今後の京都府立植物園を存続させていくためにも、非常に有益な会になると思っていますので、今後の懇話会についても、委員の皆様方には協力をしていただければ大変ありがたいと思っています。

■京都府事務連絡（次回以降の進行について）

- ・ 次回の懇話会については、本日の幅広い立場からの様々な意見を論点整理した上で、座長とも相談し、改めて連絡させていただく。

■戸部園長閉会挨拶

本日の2時間15分の会議はあっという間でした。ありがとうございます。

植物園をほめるコメントをたくさんいただきました。褒められて伸びるという言葉もありますが、どちらかと言えば、これから先の議論ではぜひ厳しいことを言っていた方が、なんとかしようとして今後に繋がっていきますので、そういったことも踏まえて、ご意見頂戴できればと思います。